

開拓の村で育った

猪瀬カツ子 鹿沼市

昭和二十年8月15日に、栃木県上都賀郡板橋落合村に生まれました。8人家族でした。

ちょうど終戦の日に生まれたわけで、戦争は直接知りません。けれども、戦争の影響を受けた苦しさや辛さは、幼い目ながらもたくさん見たり、聞いたりしてきました。

落合村は満州から引き揚げてきた人達（13の家族）と、もともとこの地に住んでいた自分たち2家族と共に作った村だと聞きました。満州からの引揚者は土地もなく、着の身、着のままに住む場所もないため、与えられた荒地を切り開き、田畑を作り、掘っ立て小屋のような家に住まわなければなりません。気の遠くなるような、大変な生活を強いられましたという事です。

満州から日本への帰途に付いた船の中で、何人も人が亡くなり、その人たちを海に放り投げたこともあったようです。特に幼子が亡くなり、海にはおらなければならなかった時の悲しみは、いつまでも頭から離れなかったよう

です。そんな思いを背負って満州からこの地に移ってきたのです。

生活のためには、子どもだからと言って働かないわけにはいきませんでした。私も、周囲の子どもたちも、みんな同じように働いてきました。「学校なんかより家が大事」と言われていたので、勉強などほとんどできませんでした。生活を助けるために、食べ物は自分で探します。山に行けば、山ぶどう、アケビ、柿、いちじく、野いちごなど、季節によってさまざま。さつまいも、じゃがいもなども畑仕事で手に入りました。

家の手伝いは、山に行って焚き木拾い、きのこ取り、ランプ掃除、お風呂の水汲みなど。現代のように、ボタン一つで家事ができるような環境ではありませんから、ほとんど遊んでいる暇はありませんでした。ただ、夕方5〜7時に、近所の牧場に行ってテレビを見ることが、唯一の楽しみだったように記憶しています。

【注】敗戦時に海外にいた軍人や一般人の日本への引揚者は六六〇万人。引揚者の多くは持ち出せる財産も制限され着の身のままの引き揚げで、日本に着いてから住む場所や食糧の不足に悩まされました。政府は住宅や就職の世話などを行い、引き揚げてきた人たちは縁故を頼って地方に移ったり、開拓団として未開地に入植しました。